町長対談「夢をカタチに!!」

馬場俊英さん × 峯岸町長

寄居町出身のシンガーソングライター・馬場俊英さんを町長室へお迎えし、峯岸町長が対談を行いました。対談テーマは「夢をカタチに!!」。情熱を注ぎ、夢をかなえ、さらに歩み続ける馬場さんの人生について峯岸町長が深く掘り下げます。

あれから40年 一人は紅白歌手に、一人は町長に

町長　馬場君と私は小・中学校の同級生ですが、あらたまって対談というのは初めてです。本日はよろしくお願いいたします。早速ですが、あれから40年経って、お互いの印象はどうですか。

馬場　同級生に、あの峯岸君が町長になったという話を聞いたり、人に言ったりすると、みんな、やっぱりね、という反応です。小・中学校の頃から、なんとなくそんな雰囲気があったような。議員と町長は全然別物だろうと思います。**50歳を超えて、迷いを断って、一歩踏み出して挑戦する。**すごいことだと思いますよ。

町長　ありがとうございます。私から見た馬場君は、大きくは変わってないですね。基本的には恥ずかしがり屋で、とても優しくて。当時から詩を書くセンスや言葉を生み出すセンスは抜群でしたね。加えて今は、**多くのファンや関係者に囲まれているからか、周囲への配慮、気遣いが素晴らしい**と思います。

馬場　ありがとうございます。

町長　馬場君と仲良くなったきっかけは、小学3年生のとき、同じクラスになったこと、そして、なんといっても**野球部で一緒**だったことです。野球をしていた時代と歌の創作活動、関係性は何かありますか。

馬場　野球は自分の人生でも大切なもので、少年時代は全力で挑戦していました。大好きだったし、原風景というか、空があって、グラウンドがあって、友達がいて。今は野球じゃないですが、例えばコンサートで歌手、演奏者、照明担当、音響担当、お客さんが**見えないボールをみんなで追いかける**ようなニュアンスを、音楽で感じています。

馬場俊英さん

シンガーソングライター

馬場俊英 BABA TOSHIHIDE

昭和42年3月20日生まれ。寄居町出身のシンガーソングライター。平成8年にメジャーデビュー。平成13年「ボーイズ・オン・ザ・ラン」をレコーディング、ラジオを中心にオンエアされ、反響を呼ぶ。平成19年大晦日「スタートライン～新しい風」で第58回NHK紅白歌合戦に出場。平成29年10月寄居町ふるさと大使に就任。現在もCDのリリースやコンサートを中心とした音楽活動と並行して、ラジオDJやテレ玉の情報番組「マチコミ」でパーソナリティを務めるなど幅広く活動。

寄居町ふるさと大使委嘱式
場所／中央公民館(寄居町民ホール)

町長　シンガーソングライターになったきっかけは?

馬場　小・中学校の頃は、野球もギターも好きでした。プロ野球選手には小学4年生ぐらいまではなりたいと思っていましたが、どうやらあまり上手ではないなと気付き始め、高校野球には行けないなと感じていました。

　その後、フォークミュージシャンになりたいと言って東京に行きました。当時はまだ、レコード会社に認められないと世に出られないという風潮で、デモテープを持って売り込みをしていました。アルバイトと並行で音楽活動をしていたら、25歳ぐらいでレコード会社等から連絡が来るようになりました。当時は自分の父親も商売をやっていて、いつ継ぐのかといった話もありましたので、音楽の世界に入るのはギリギリのタイミングだったと思います。

町長　当時を振り返ってみていかがですか。

馬場　会社の人との付き合いが始まり、創作活動をしていた中で、作曲してみないかという話が入り、当時の女性歌手に曲を提供しました。それが1995年です。**寄居町の「雨宮レコード」でずっとレコードを買って育ってきたので、いつか自分の作品をそこで買うというのが憧れ**でした。この憧れがかなったことが、今までで一番感動した記憶です。

　当時はとにかく音楽の分野へ向かって、どうやったら実現するのか、その日できることをやるということに、ものすごく燃えていましたね。

32歳、人生観が変わる

町長　当時はスタッフがいるわけではなく、全部自分でやっていたのですか。

馬場　そうです。僕の場合は、1回デビューをして、最初はあまり成績がよくなくて、そのとき31歳ぐらいだったのですがもう1回チャレンジしました。これも成功しなくて、そのときはいろいろ葛藤がありました。

町長　そこから盛り返すのは大変だったと思います。

馬場　やはりアマチュアで音楽活動をしているのと、企業の中で一つの商品として役割を担ってやっていくのは全然違うと感じましたね。そこで、自分でレコード会社を作りました。当時は大阪が一番手応えのあった地域だと感じていたので、関西へ行ったのですが、受注はなかなか取れない。全く相手にされないこともありました。すると、自我みたいなものが崩壊していく感覚になったわけです。**途中、歩きながら泣けてきました。**そこで認識を新たにして、それからいろいろ変わっていきました。

町長　どう変わったのですか。

馬場　遅ればせながら、自分でやることの大変さを知ったのが32歳ぐらいで、**そこが革命みたいな時代でした。**ライブを開催するにも、自分でやるにはスタジオ代やスタッフの賃金等は全部自分で手配しなくてはいけないので、しっかりと準備するようになり、そこで人間性が生まれ変わりましたね。

町長　紅白に出場したときの曲「スタートライン」の世界ですね。**〝何度でもやり直せる〟〝チャンスは君のそばにある〟**と。

峯岸町長